

梶井基次郎私観

—レモンから檸檬へ—

小田桐 弘子

要旨

もし、「ミニヨンの歌」が「レモンの木は花咲き…」ではなく原詩の通り

Kunst du das Landの直訳ではじまっていたらどうであつたらうか。

「レモン」の訳語によって日本近代詩史が始まったことは既に先学により、実証されているところである。小論は、このレモンからの連想である梶井基次郎の「檸檬」をつないで、私観を述べたものである。

キーワード：ミニヨン、レモン、明治浪漫主義、モダニズム、憧憬

はじめに

私にとって、レモンは果物屋の店頭にかざられているよりも、翻訳詩集『於母影』のゲーテの「ミニヨンの歌」の冒頭からはつきりとい
メーじされるレモンであった。もし森鷗外が後に翻訳した『即興詩人』の訳語のように、「檸檬^{リモン}」と表記したとしたり、いかがであったで
あろう。明治二十年代の読者には、ハイカラさと、新鮮さはよほど違って受けとめられたであろうと、想像される。

「レモン」の木は花さきくらき林の中に

こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり

青く晴れし空よりしずやかに風吹き

「ミルテ」の木はしずかに「ラウレル」の木は高く

くもにそびえて立てる国をしるやかなたへ

君と共にゆかまし

Kennst du das Land, wo die Zitronen blühen,

Im dunkeln Laub die Goldorangen glühen,

Ein sanfter Wind vom blauen Himmel weht,

Die Myrte still und hoch der Lorbeer steht,

Kennst du es wohl?

Dahin! Dahin

Möcht'ich mit dir, o mein Geliebter, ziehn!

ドイツのようにやや灰色の季節の方が長い国の人、ゲートルにとり、すつきりと晴れて青い空の国イタリアへの憧れは、“Zitronen blühn, Gold-Orangen glühn”——レモンの木の花が咲いていて、金色の柑子が枝もたわわに実っている——に象徴されている。まして、森鷗外訳の「青く晴れし空」は原語では、“blauen Himmel”で、鷗外訳のように“青く晴れし空”ではない。理屈を言えば、“青い”のは晴れているからであるが、原詩の各行十音節に対して、鷗外は二十音にするために工夫したのであると、すでに多くの先学によりいわれている。色彩的には青空のしたで、「こがね色したる柑子は枝もたわわにみの」⁽¹⁾っているほうが、イメージとしては、強い。しかし、冒頭の「レモンの木は 花さき」のカタカナ表記の「レモン」は、この詩について、背景について何ら知識をもたない者にも、さわやかさを感じさせる。平川祐弘氏の『東の橋 西のオレンジ』において、オレンジの比較文学・文化史的背景や魅力が、語られている。「ミニヨンの歌」にも詳しく、言及されていて、興味深く、多く示唆をいただいた。

翻訳詩集『於母影』が世にでた明治二十二年頃、「レモン」は一般の人々の眼にはいったであろうか。「ミニヨンの歌」の当時の読者たちに冒頭の「レモン」の一語は、食したことはないけれど、さわやかさ、新しさをまず感じたのではないだろうか。この詩をはじめて読んだ頃からの私の疑問は、今ももち続けていて、まだ調べ尽くしていないが、何故“Zitronen”を英語で「レモン」と訳したのであるか？ということである。Zitronenは「レモン」と現代の『独語辞書』にも訳されているが、明治も二十年代、日本人にはレモンもシトロロンもともに、書物で見るだけであつたであろう。

冒頭でふれたように、鷗外は後の明治二十五年から三十四年にかけて、アンデルセンの『即興詩人』を訳出した。ここでは、北欧の人アンデルセンは同じくデンマーク出身の登場人物が、イタリアの南部のナポリに向かう途中に、目にした果樹園の風景をイメージ豊かに記している。この中では、「柑子」^(カウジ)「檸檬」^(リモン)とルビが付されていて、「レモン」ではない。しかも、何故か「檸檬」のルビにはへくで囲っている。「ミニヨンの歌」の純然たる色彩をぬきだすと、レモンより、「こがね色したる柑子はえだもたわわにみのり」“Goldorangen glühn”の方が強いが、清々しさ、明るさは第一語のカタカナ表記の「レモン」によるところ大である。

因みに、「Tee mit Zitronen Lemon入り紅茶、レモンティー」と、示されている。しかし、昭和十二年三月にはじめに編纂された白水社の

仏和辞書の〈the〉の項目には〈the complet 紅茶とクリームとバター附卷パンなど〉と説明が付されている。コーヒーをより多く飲む習慣の国であるからであろうか。フランス語の〈citron〉にも、〈the〉はなくて、〈citronnat レモンのジャム〉、〈citronnelle レモン水〉とあり、日本式英語表現であるレモン・ティーという語は使われていない、ということは、一九三〇年代にはすくなくとも、ヨーロッパでは日常的・習慣的にあまり飲用されていなかったからといえる。

鷗外がドイツでの四年余にわたる留学から帰国して、『於母影』を世に問うた明治二十二年から二十三年頃、レモンはまだ日本では生産されていなかった。また、紅茶をのみ習慣もごく一部の人々のものであつたであろうし、また紅茶にしてもレモン・ティーよりも、英国風のミルク・ティーの方がまだしも飲まれていたのではないだろうか。

因みに古い文献からも採集された『植物和漢異名辞林』の「れもん」の項目には、〈檬（へんるうだ科）別名りまん。里木子、宣母子〉とある。また、『日本国語大辞典』（第十三巻）では、「レモン【檸檬】（英 lemon）（中略）主産地はイタリアのシチリア・マルス島および北アメリカのカリフォルニア地方。学名は Citrus limon 《季・秋》*薬品名彙（1873）《伊藤謙》「Lemons 檸檬」*三風料理（1887）（伴源平）「牛の脂食塩麵包胡椒鶏卵牛乳檸檬（レモン）皮肉豆蔻早芹菜肝等を醬油に加へ」と記されている。以上から、明治六年（1873）、明治十九年（1887）には、レモンは日本に輸入されていたであろうけれども、上記の伊藤謙や伴源平の説明は啓蒙的な知識であつて、一般人の食卓に登場していたものではない、と想像される。ともあれ、鷗外訳「ミニヨンの歌」に登場した「レモン」はドイツ人ゲーテが長く想像し、憧れた風景の中の「レモン」とはまた違ったハイカラさと、一種のすがすがしさを明治の読者に与えたであろう。

「ミニヨンの歌」を愛唱する人は広く、多数で明治から大正、昭和と多岐にわたり、文学青年のみならず、東大退官後、私の母校に移られた物理学者の山内恭彦博士から、当時の旧制高校生のころ、多くのドイツ語クラスの友人たちとも愛唱していた、と仰有つて、七十歳になんなんとする先生が「ミニヨンの歌」の一節をドイツ語で吟じてくださったのを、大学院の学生時代、一九六八年ころであろうか、うかがったことがある。

そのような明治風ロマンティズムにひたっていたある時期を経て、まったく偶然的に梶井基次郎の『檸檬』にであつた。梶井基次郎は私にとって、それ程ひかれる作家ではなかつたが、たまたまはじめて母校の講師に就任した三十余年前に、主任教授からご指示をうけて採

用したテキストに「冬の蠅」が収められていた。と同時に横光利一の「蠅」も冒頭にいれられていた。以来、両者をならべて、学生に近代文学講読の授業の中で、はなすことになっている。このことをきっかけとして、梶井基次郎について私自身も考えはじめたというのが、正直なスタートである。横光利一と梶井は三歳しか年令は違わないが、梶井が世にでたのは、むしろ死後であるが、横光は新感覚派の旗手として、大正末にデビューし、その後の昭和文壇において活躍した。

短い人生であった梶井の作品は少ないが、本稿では、『檸檬』の作家梶井基次郎について再考し、あわせて、同時代人横光利一についてもふれてみたい、と考えている。

— 梶井基次郎のこと —

大谷晃一氏の『評伝 梶井基次郎』は鈴木貞美氏も『梶井基次郎 表現する魂』で引用されているように、綿密な詳細な梶井の評伝であるが、残念なことに私をはじめ梶井について、講義を担当しなければならなかった一九七三年には、まだ、単行本としては、公刊されていなかったもので、手に入らなかった。最近、手にして多くをご教示いただいた。三十年あまりまえに調べたことと、あわせて、以下梶井について簡単に、述べていく。

梶井は明治三十四年（一九〇一年）二月十七日大阪市でうまれた。当時としては珍しく母ヒサは職業婦人であった。市立大阪高等女学校の附属保母養成所を首席で卒業後、保母として働いていたが、明治二十八年に宗太郎が養子婿となり、ヒサのところに来た。長女富士、長男謙一をえてからも勤め続けたが、次男の基次郎が三歳になった頃、ようやく家庭に完全に入ったようである。

大谷氏のご調査は当時の大阪の時代背景、日露戦争開戦、続いて起こる景気発展、日本経済の変化の状況など、余すところなく、丁寧にされているが、本稿では省略する処も多い。父親の宗太郎は安田商事の会社員で、日露戦争で景気の上昇時には、ご用船の船員の慰労など、一時はやっていた社用族で、酒色の巷で遊ぶこと多く、家庭生活がみだれていた。ふたりの異母弟が生まれ、母ヒサはしばしば三人の子を抱え投身自殺を考えたこともあるという。

七歳で基次郎は大阪の西区江戸堀尋常小学校に入学。翌、明治四十一年急性腎臓炎にかかり死にかかったこともあった。次の年、父の転勤で東京の芝区白金頌栄尋常小学校に転入。その後父の転勤で、三重県鳥羽に移り、中学に入学する。大正三年（一九一四）、十四に基次郎がなった年、大阪にかえり、大阪府立北野中学校に転入する。翌年、十一歳から一緒に暮らしていた異母弟が中学校を中退して、商家に丁稚奉公することになったのに、同情して自分も北野中学を中退し、メリヤス問屋に丁稚奉公したが、母のたつての願いからやめて、自宅に帰り、北野中学校に復学した。大正八年（一九一九）、十九歳で北野中学校を卒業した。その頃、片想いの初恋を経験したようである。

大阪府立高等工業学校の電気科を受験したが、不合格。七月第三高等学校の入試をうけて、理科甲類に合格した。当時の学制では新学期は九月に始まり、翌年七月に終わるので、十月から寄宿舎北寮第五室に入った。後に『梶井基次郎』をかいた、中谷孝雄や、一九四五年戦後、映画評論家として、活躍した飯島正らと同室であった。その頃夏目漱石や谷崎潤一郎を愛読した。その少々前、病床にあった基次郎に兄謙一が森鷗外の『水沫集』を買って与えたが、それを夢中でよみふけていたと、兄から聞いたと、大谷氏は述べ、「基次郎が文学に目を開いたとき、そこに見たのが西欧だった。それに深く魅せられている。」⁽²⁾とも記している。はじめの、西欧体験、または異文化体験は森鷗外からであったと、しるされているのは示唆的である。三高時代の梶井について、飯島氏は、梶井の文学の話はあまり覚えていないが、それよりもベートヴェンの音楽をどなる方が耳に残っていると、肺病になりたいといって、自分の胸をたたいたことをはっきり記憶している。肺病にならなきゃいい文学はできんというようなことを、どなっていた、⁽³⁾と思ひ出を語っている。

その後の歩みを簡単に追ってみよう。

大正九年 二十歳、肋膜炎にかかり休学、転地療養して回復。

大正十二年（一九二三）三月、前年に学制改革で三月終了制度になったが、梶井は卒業試験に落第。

大正十三年、（二十四歳）五年間在学し、ようやく第三高等学校を卒業して、四月に東京大学英文科に入学した、が肋膜炎、肺結核、腎臓病などの病気が再発した。

昭和三年（一九二八年）二十八歳の時、大阪にかえる。

昭和四年、父死亡。

昭和七年三月二十四日午前二時に梶井は死亡した。複数の病気をかかえつつ、梶井は病氣と闘いながら、執筆活動を続けて、生誕の地の大阪で、果てたのである。大阪市東区上本町常国時に葬られている。

梶井の文学的生涯、芸術的人生をかえりみると、先に述べたように漱石と潤一郎を愛読していた、三高生の頃、梶井潤二郎と自称していたこともあった。

大正時代によく、欧米の演奏家が来日するような時代を迎えた。梶井が二十一歳のとき、ヴァイオリンのエルマンが来日して、京都市公会堂で開かれた演奏会をききにいき、エルマンと握手したことを感激的に彼自身が語っている。

また、『器樂的幻覚』によると、「ある秋仏蘭西から来た年若い洋琴家はその国の伝統的な技巧で豊富な楽曲を冬にかけて演奏して行ったことがあった。そのなかには独逸の古典的な曲目もあったが、これ迄噂ばかりで稀にしか聴けなかった多くの仏蘭西系統の作品が齎らされていた。」と冒頭に書き記し、続いて、何週間にもわたる六回の連続演奏会で、好ましく思いつつ通っていた、と述べている。その他ハイフェッツやピアノのゴドウスキーらがアメリカから来日し、梶井はかなり刺激されて、音楽に親しんでいった。

美術に関しては、大阪朝日新聞社主催のロダン、ルノアール、ドガ、ゴーガンの展覧会の入場券の申し込みをするといったことを、友人への手紙に記している。この頃、友人と松方コレクションの展覧会にも出向き、セザンヌやゴッホの絵をみている。

大谷氏によると、「セザンヌ三点、ゴッホ一点、ゴーガン三点。すばらしかった。会場にふたりしかいない。セザンヌの小さい静物画の前で、基次郎がささやく。これ、盗みましょうか。ひそやかな企み。梅原龍三郎よりも岸田生を、マネーよりもダ・ビンチを、そしてルノアールよりもセザンヌを基次郎は愛した⁽³⁾。」という。

大正十二年、病氣療養中に、十二枚の習作『大蒜』を記し、セザンヌをもじった瀬山極と署名している。この以前まだ、元気で京都にいる頃、友人とよく散歩にでかけ、丸善に入っている。

私は丸善に特殊な享樂さへ持つてゐたものなのだ。それは赤いオードキニンやオードコロンの壺や、洒落たカットグラスの壺やロコ、趣味の浮し模様のある典雅な壺の中に入つてゐる、琥珀色や薄い翡翠色の香水を見に来ることだつたのだ。そんなものを硝子戸越に眺めながら、私は時とすると小一時間も時を費やした事さへある。(略) それに私には画の本を見る楽しみがあつたのだ。

と、後に「檸檬」となる習作「瀬山の話」に書き記している。この瀬山は（瀬山極）の変形ペンネームといえよう。この中ではレモン、または、れもんと記していて、「檸檬」と漢字書きは用いていないことには、注意したい。

大正デモクラシーといわれるこの時代、西洋音楽や美術が、また上記のような贅沢品というか、ヨーロッパ直輸入品がかなり移入されはじめた。この波を梶井は、大いに受容し、やはりその丸善で、セザンヌやゴッホの画集を棚から取り出して、時間を忘れたように没入し、同行の友人、たとえば中谷孝雄などを、じりじりさせるほど、待たせたという。

この頃から「檸檬」の第一稿に着手したが、相変わらずデカダンな生活を続けていた。と同時に時代の影響であろうか、武者小路や倉田百三らの人道主義、賀川豊彦の基督教的社会主義、はたまた他力仏教などに心を動かされ、文学に進むべきか、社会運動に行くべきかに迷う日もあった。三高時代は芸術への憧憬を深くもちながら、彷徨遍歴を重ねて過ごした。

大正十三年秋に、東京大学文学部英吉利文学科に入り、同人誌を計画する。すでに、前年、横光利一は「蠅」「日輪」を商業雑誌に発表し、十月には『文芸時代』を川端康成らと創刊している。梶井の同人としては、後にマルセル・ブルーストの『失はれし時を求めて』の本邦初訳をなしとげ、後の日本文学に多大なる影響を与えた、淀野隆三も参加した。続いて、飯島正、三好達治も後に同人誌名『青空』に入っている。

大正十四年一月に、中谷孝雄、外村繁らと、同人誌『青空』創刊し、梶井は「檸檬」を発表した。

淀野隆三は後「梶井と三好のこと―思い出すままに―」のタイトルで、三好について、つぎのように述べている。大正十三年、はじめてあった梶井に三好はすっかりとりこになった、その頃三好は東大の仏文科の学生で、サンボリスム詩人のヴェルレーヌに傾倒しつつ、詩作していた。梶井より一つ年上で、三好の同級には、小林秀雄、今日出海や中島健蔵らがあった。

淀野は梶井には、三好という詩人がいることを話す一方、三好にも梶井の存在を語り、『青空』に加わることをすすめていたが、三好は容易にはおうじなかつたが、ようやく大正十五年の四月末、仲間に加わり、以後作品をかなり発表し、両雄は、急速に親しくなった。梶井が亡くなってから、三好は「友を喪ふ」中の、一篇で次のように歌っている。

巻いた楽譜を手にもって 君は丘から降りてきた 歌ひながら

村から 僕は帰ってきた 洋杖を握りながら

ある雲は夕焼けのしている 春の島

梶井基次郎が療養のため、伊豆湯ヶ島に滞在していたころの、風景であろう。三好は梶井の思い出の一文を記しているが、その中で梶井が「冬の日」をかいているころのエピソードを記している。二人が同じ家にすんでいた頃、梶井はしばしば咯血した。そんなある夜、梶井が唐紙越しに三好を呼んで「葡萄酒を見せてやらうか……美しいだらう……」⁽⁴⁾といいながら、七分目ばかり入ったコップを電灯にすかしてみせてくれた。これは彼のはいた血で、「そんな大胆な嫌がらせをして、人をからかってみる、野放図と茶目っ気のいりまじった何かがあつた」⁽⁵⁾。このエピソードは、三好のいう「大胆な嫌がらせ」とか、「野放図と茶目っ気の入りまじった何か」と同時に、自分の苦しみすらも、視覚的というか、ヴィジュアルなセンスで自己客観化・客観視する習性があつたともみえる。

その後、大正十五年一月「青空」に、「過去」を発表したが、四月には、肋膜炎を再発。六月「雪後」を発表。

八月「ある心の風景」

十月「Kの昇天」を「青空」に発表するが、秋から冬にかけてしばしば血痰をみることになり、十二月末に伊豆の湯ヶ島に転地する。友人の淀野によると、川端康成がいたのでこの地を選んだというが、ここで川端と知りあい、川端の原稿の校正などを手伝い親しんでいったようである。この頃の梶井について、「梶井基次郎君はいい手紙を書く」⁽⁶⁾にはじまる好意にみちた思い出の記「梶井基次郎」をあらわし、悼んでいる。

伊豆において、療養をしながら、執筆を続けて、昭和二年の二月と四月の「青空」に「冬の日」を発表する。当時はプロレタリア文学の擡頭時代で、梶井もひそかに激しい関心をもった。湯ヶ島の生活で、萩原朔太郎、広津和郎、尾崎士郎、宇野千代ら、いわゆる大森・馬込村在住文士がやはり湯ヶ島を訪れていて、はじめて、梶井は文壇人と交遊する。三好達治も夏休みで来あわせて、この時が縁で三好は朔太郎に師事した。また、梶井基次郎が文壇人に知己を得たのも、これが縁であった。

この頃ボードレールに親しんだと、多くの年譜などに記されているが、鈴木氏の著書によると、原文ではなく、「ノートにシャルル・ボードレール『パリの憂愁』のアーサー・シモンズの英訳本から「エピソード」「貧者の眼」「酔え！」「菓子」などを写しはじめ（略）：

(7) ……」とある。この頃（昭和二年十二月）一向に病気がよくなり、死へ突入しようとしている、とか「日光より闇」を嬉ほうとして
いるなど、友人に手紙を書き記している。

昭和三年二十八歳になったが、一月に浅見淵の勧めで、『文芸都市』の同人となる。

以下、発表作品と掲載誌を羅列する。

三月号「蒼穹」、はじめての他誌への発表である。

四月、「笈の話」を『近代風景』に発表。

五月、「冬の蠅」を『創作月刊』に発表。上京し、本所深川辺の貧民街に住むが、病気がひどくなり、九月には大阪の自宅にかえる。

七月、「ある崖上の感情」『文芸都市』

十二月、「桜の樹の下には」「器楽的幻覚」を『詩と詩論』第二輯に発表。

昭和四年、二十九歳になるが、マルクスの資本論に傾倒したようである。

昭和六年、五月友人たちの尽力により、創作集『檸檬』を武蔵野書院から刊行した。

昭和七年、三月に三十一歳でなくなるが、一月『中央公論』に「のんきな患者」を発表。脱稿は、前年十二月で、はじめて原稿料をもらった作品である。

以上、端折りながら梶井基次郎の生活と作品をみてきた。

「檸檬」について

先述のように、「檸檬」は大正十四年に『青空』の巻頭に発表されたものである。この作品により梶井文学の特色をかなりよく示すことができる。まず出だしの一行の「えたいのしれない不吉な塊」という一つの心理状況の根源を示す象徴的表現をぶつけている。それからこの表現を説明するという形で、毎日の酒、宿酔い―肺尖カタル―神経衰弱―借金という青春のデカダンな生活をちらと示す。そして、その

ような生活以前に、「私」を喜ばせた美しい音楽や美しい詩があったことをも示す、たった十行のはじめの一節に、一人の青年の生活・精神と肉体の歴史が語られている。しかも、この歴史は羅列的な述べ方ではなく、冒頭の「不吉な塊」を説明するための背景として、条件として、たくみに織り込まれている。

続いて、「私」は私の憂鬱な感受性の細やかな描写があり、ある日、たった「一顆」の「珍しい檸檬」によって、「あんなに執拗だった憂鬱」が紛らわされ、「始終私の心を圧へつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たと見えて、私は非常に幸福であった」。その勢いで、以前私は好きだったのに、この所、重苦しい場所にすぎなくなっていた、丸善に入り込んでみる。ところが、「然しどうしたことだらう、私の心を充たしてゐた幸福な感情は段々逃げて行つた。香水の壺にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る」。以前、私をひきつけ、今は変にそぐわない色とりどりの画集を積み重ねた上に檸檬を据えることによって、「私」の精神は安定する。

「不意に第二のアイデアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、何喰はぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行かうかなあ。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行つた。

たったこれだけの短編である。ここには、「私」という主人公のほか誰も出てこない。ストーリーというものはない。ただ、一人の「私」という青年の感受性——「えたいの知れない不吉な塊」に支配されている不思議な動き——憂うつから快活——憂うつ——快活である。このように細かい感覚を追いつながら、各段落はすべて、主人公（私）の生活、習慣、感覚、感情、心象が微細に説明付けられている。はじめの部分の青春のデカダン生活は他の私小説作家ならば、これだけで一篇の私小説をつづっているだろうし、また「檸檬」全体はいうならば、ストーリーには人間のドラマや、その転換もしくは山場はない。これだけの長さではなく数行で終わらせる内容ともいえる。しかし、日常感覚ではなく、一步感覚の内部に入り、対象——ここではレモンではなく、「檸檬」を媒体とした——微妙な感受性を徹底的にみつめ、連続的に追求した心象内部を描いている。一見、志賀直哉の「城の崎にて」などとの類似という人もいるが「檸檬」はまったく、違っている。

昭和五十二年の『文芸読本 梶井基次郎』には、当時の代表的作家・文芸評論家がエッセイ・評論・追悼の記を掲載していて、なかなか

興味深い。安東次男氏の「幻視者の文学」で、「(略) この絵画的な短編はセザンヌあたりのレモンを配した静物からヒントを得たかもしれない。」⁽⁸⁾という指摘がある。吉行淳之介と川村二郎の対談「書くこと・見つめること——梶井基次郎をめぐって」では、かなり、共感を持つ部分と、率直に否定や疑問も呈されている。吉行が「丸善で爆弾を仕掛けるという発想法ってのは自意識過剰の、まあ、人ですな。」、川村氏は「梶井はずっと残るにしても、なかでは『檸檬』はだんだん古びてくるんじゃないかという気がする。(略)」また、続けて、吉行は「いまだにあれはなぜ片仮名で、あるいは平仮名で「れもん」としなかったかと……やはりあのまがましい感じの字の形、これはやはりかなりのもんだったですね、ぼくにとっては。平仮名もしくは片仮名にすると、すがすがしくなっちゃう。」と、「檸檬」ネイモウとよめる字体に、戦争中に感じたまがましい、戦争の雰囲気とが、うまくあわさって、読まなければと思つたとのべていることは、示唆的である。実際、梶井は「瀬山のはなし」などの習作では、「レモン」とか「れもん」と何回も記している。すなわち、吉行の感じ方は梶井の意図したねらいを確実にうけとめた読者であつたわけである。「すがすがしく」なつては、作者にとり、計算外で、あつたはずである。

山本健吉の評論をあげてみることにする。「この作品は(檸檬のこと)、彼の倦怠や憂鬱が僅かに一顆の檸檬に依つて晴らされたことを書いたという以上に、一顆の檸檬の中に彼の豊かな内的経験の総てを圧縮した、謂わば一瞬の裡に檸檬を彼自身の象徴と化しおえたという彼の心情の飛躍を見出すのである。だからこの作品は、残された種々の習作——『檸檬』を挿話とする断片『瀬山の話』『檸檬の歌』など——からその創造の課程を辿ってみても、書いてゆくうちに一顆の檸檬の形象だけが、けざやかに残されたといったもので、あらゆる内心の言葉(紡錘形の身体の中)へ吸収してしまつて冴返つていった形である。」⁽¹⁰⁾

萩原朔太郎が一九三五年に梶井について、「本質的な文学者」の題のもと、「檸檬」は小説というより「小品」もしくは「散文詩の範疇にぞくすべきもの」といい、「近頃になって、梶井君の夭折がまたつくづく惜しまれる」⁽¹¹⁾との讃辞を述べている。

「冬の蠅」について

この短編は「冬の日」に続く作品である。「冬の日」で描いた(いらだたしさ)が、憎悪に変わると、読む人もいる。この時期——湯が

島時代——の一つの極に達した作品とも読まれる。構成としては「序」やや長い「一」、中間くらいの長さの「二」、短い「三」から成立している。肺病の主人公は伊豆の温泉宿で冬の日光浴をしながら、周囲に集まるはえの生態を観察して、その生きようとする意志に驚いたり、日光下の弛緩した幸福に憎悪を感じたりしている。ある日、彼は気まぐれに、バスに乗って外出して、暮れかかった山の中でバスを降りて、つかれたように夜道を歩く。「定罰のやうな闇、膚を劈く酷寒」の中で、彼は生の緊張と戦慄をかんじるのである。結局、三日ほど外泊し帰ってくると、蠅は死んでしまっていて、一匹もいなかった。というのが話の大筋である。

死と隣り合わせながら、日溜まりの微温を憎み、「日の当った風景の象徴する幸福な感情を憎む。其処には感情の弛緩と神経の鈍麻と理性の偽瞞とがある。」と山本健吉氏は評している。鈴木貞美氏が『桜の樹の下には』を論じた中で、「精神の生を追い求めることが肉体の死を呼ぶという『冬の蠅』のモチーフとも確実に重なっている」⁽¹³⁾との示唆的な発言もある。

その後の「闇の絵巻」や「のんきな患者」など、私小説と同列にみる評論もあるし、梶井自身はかなり批判的であつた横光利一は、梶井を評して日本文学から世界文学にかかつている僅かの橋のうちのひとつと称賛している。

また、中村真一郎氏はつぎのように述べている

新感覚運動は、横光利一がみずから述べているように、在来の日本語の表現を破壊し、新しい表現を創造するところ、その主力が注がれた。(略)「新感覚」というより「新表現」であつて、感覚自体に新領土を開いた、というわけではないだろう。

しかし梶井の代表作のひとつである『檸檬』⁽¹⁴⁾という作品は、従来の誰もが踏み入れたことのない感覚の新しい領域なのである。

「蠅」について

「蠅」は若き日の横光——二十歳から二十五歳——の習作ともいえるものである。真夏の空虚な田舎で、馬車による交通機関しかないような宿場風景を、蜘蛛の網にひっかかった蠅の眼を通して追っている。この作品はかなりの、論者によりとりあげられているが、由良君美氏が言いはじめた、蠅の役割は「カメラ・アイ」とするところから出発した論議も多い。多くの論者のご意見もその通りであるが、若き日か

ら「純粹小説論」にいたるまでも主張している、表現対象に対する視点との関わりで考えたい。私感としては第四人称への志向に考えが及ばざるをえないものがある。すでに、度々、私論において言及しているが、平野謙氏のいわれる、純粹小説論は、昭和十年代文壇に対する状況論では決してない。「蠅」の構想当時は、もちろん、デュアメル「パスキエ家の人々」については、何ら知識はなかったであろう。しかし、習作を志した当初から、横光が求めた視点と、その表現形式であった。「蠅」の眼はいつてみれば、すべてをみおろす、俯瞰する眼差しであることが必要であった。「パスキエ家の人々」よりも、はやくに第四人称的なもの、神のような視点の必然性を実作において示唆していたと考えられる。

おわりに

かざられた枚数のため、作品紹介に関しては、はぶかざるを得ない部分が多い。同時代に生をうけ、一人は昭和文学の代表作家として多くの作品を世に表し、片方は夭折し、存命中は多くの読者をえずにいたが、現代的意味において再考されはじめているということは、日本文学の運命を考えるのに、まことに示唆に富む。

さわやかなレモンにはじまり、蠅でこの小文を終えるのも可としない思いもあるが、去る六月十八日、日本比較文学会全国大会が仙台の東北学院大学で行われた。この一つに、「身体と感覚の近代——このモダニズム文学を中心として——」と題するシンポジウムが開催された。とりあげられた作家として、横光利一と梶井基次郎が中心であった。モダニズムを身体と感覚、すなわち触覚的に捉えることを、近代文学・現代芸術がいかに、どれほどに表現したのかというのが、中心的課題というか・ポイントであったように思われる。モダニズム比較文化論的周辺や歴史的的位置付けなど、興味深いものがあった。

「ミニヨンの歌」はゲーテが少女ミニヨンにたくした、南の国イタリアへの憧れであることはすでによく知られたことである。この詩は、ゲーテがイタリアを訪れる前に書いた長編小説『ウェルヘルム・マイスターの徒弟時代』の第三巻の冒頭で、少女ミニヨンにうたわせている。この詩はヨーロッパでも、広くゆきわたっていることは、トマのオペラの中で「君を知るや南の国」、シューベルトやヴォルフも作曲

しているし、ボードレールの「旅への誘い」もまた、影響があるという。⁽¹⁵⁾ 日本では薄田泣菫の「望郷の歌」となって、上田敏により、「ミニヨンの歌」に通じて、而も大に日本趣味を發揮していて面白い、と評されている。藤村の「新泉」の「知るや君かしこに湧ける泉あり(略)君と行かましかの泉」は詩想というよりも、鷗外訳の訳語の模倣に近いが、これも翻訳詩集『於母影』の「ミニヨンの歌」がいかに愛唱されたのかということの証明でもあろう。梶井基次郎が鷗外の『水沫集』や『即興詩人』を初恋の頃、愛読したという、証言はあるが、『於母影』については不明である。

レモンから檸檬へと、再考を重ねていきながら、イメージの転換ということに思いがいきついた。大学の学部の学生で十代のおわり頃、土居光知先生が T. S. Eliot の *The Waste Land* 『荒地』の特別講義をされた。当時、あまり勉強熱心な学生ではなかったけれど、この詩の第一連の "April is the cruelest month" には、幼い私の気持をとらえて離さないものがあつた。それまでの私には「四月」は、ちょうど横光利一が愛読した北歐人キーランドの「希望は四月 緑の衣を着て」であつたからであらう。「詩」の一語が読み手にもたらず言語効果について、イメージの転換についての再生を、自己の内部ではかりつつ、梶井基次郎の諸作を再読してみた。

註

- (1) 平川祐弘『東の橋西のオレンジ―文学的感受性の伝播のあとをたどって―』株式会社文芸春秋 一九八一年三月、二〇六―二五二頁
- (2) 大谷晃一『評伝梶井基次郎』河出書房新社 一九八九年四月、六十四頁
- (3) (2) に同じ 一一七頁
- (4) 三好達治『梶井基次郎』『文芸読本 梶井基次郎』河出書房新社昭和五二年四月、一四〇頁
- (5) (4) に同じ
- (6) 川端康成『梶井基次郎』(4) 所収 七十五頁
- (7) 鈴木貞美『梶井基次郎 表現する魂』新潮社 一九九六年三月、二四〇頁
- (8) 安東次男『幻視者の文学』(4) 所収 二六六頁
- (9) 吉行淳之介・川村次郎『書くこと・見つめること―梶井基次郎をめぐる―』(4) 所収 九十五頁
- (10) 山本健吉『梶井基次郎』(4) 所収 六十五頁
- (11) 萩原朔太郎『本質的な文学者』(4) 所収 七十八頁

- (12) 山本健吉「梶井基次郎」(4) 所収 六十七頁
- (13) 鈴木貞美(7)に同じ 二五九頁
- (14) 中村真一郎『この百年の小説―人生と文学と―』新潮選書 昭和四十九年二月、一四〇頁
- (15) (1)の平川祐弘氏のご著書からも、多くご教示いただいた。また、一九八二年四月二十四日の読書新聞「書架紀行」に読書随想として感想を記したが、福永武彦先生の『異邦の薫り』は、明治以降の十三冊の訳詩集から選ばれた原詩付きの翻訳詩集である。冒頭の詩集は「於母影」で、「ミニョンの歌」もとりあげられていて、先生の分析や解説は私には豊かなイメージを示唆していただけだ。

参考文献

杉本唯三著『植物和漢異名辞林』第一書房 昭和五十七年九月
日本国語大辞典(第二版)第十三卷 小学館 平成十四年一月